



Title	いわゆる「逆接」を表すノニについて：語用論的意味の語彙化
Author(s)	衣畑, 智秀
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2001, 35, p. 19-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47935
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

いわゆる「逆接」を表すノニについて

— 語用論的意味の語彙化 —

衣 畑 智 秀

0. はじめに

本稿で取り上げるノニは、ケド1) とともに、いわゆる「逆接」を表すとされてきた。たとえば、次のような例でそれぞれは置換可能である。

- (1) a. 雪が降っている (けど／のに) 父は出かけた。
- b. 太郎は学生 (だけど／なのに) 次郎は学生ではない。

(1a)「雪が降っている」ことは、父が出かけないことを含意し、その含意が「父は出かけた」と矛盾している。この矛盾関係が一般に「逆接」と呼ばれるものである。

しかし、ノニはケドに比べて、違和感、意外感、不満などを表わすという2)。さらに、ノニの使用される文 (以下「ノニ文」と呼ぶ) は、後件が既に実現した事態に限られるという特徴がある。

- (2) a. 雪が降っている (けど／*のに) 出かけなさい。
- b. 雪が降っている (けど／*のに) 出かけよう。

しかし、従来の研究では、なぜノニにこれらの特徴があるかに対する説明は十分でなかった。十分でないというのは、かりに「逆接」というカテゴリーがあるとしても、なぜノニやケドのような意味的な差異が作られる必要があったのかが問われなかったからである。本稿では、この問いに対し、ノニは「逆接」というカテゴリーの一部を特殊化させたというよりも、

違和感や不満を感じる、人の経験的側面を語彙の中に反映させているということから説明する。

1. 先行研究

1. 1. 丹羽1998

丹羽1998では、ケドが「意味的に肯定否定の関係に対立する」(p. 92)ことを表すのに対し、「PのにQ」というノニ文を、次のように記述できるとしている。

- (3) Pが成立し、Pからの推論を経てRを話者が推量・希求する状況において、または、Pを話者が推量・希求する状況において、それに反して、Q ($= \sim R$ または $\sim P$) が成立する。(p. 102)³⁾

たとえば、(1a)の前件から推論される父が出かけないこと(R)は、「父はでかけた」($Q (= \sim R)$)と肯定否定の関係で対立しているが、ケドの場合この「父が出かけない」という「推量」は、「雪が降っている」ことから「行かないことが一般に推量される」(p. 106)といったものであり、ノニの話者個人の推量とは区別されるので、ケドはノニのような「意外感」「驚き」「不満」(p. 106)などのニュアンスを持ちにくいとしている。また、(2)の適格・不適格性についても、この「推量」が話者個人のものか、常識だと話者が判断するものかという違いから説明がなされている。すなわち、ケドの場合、出かけないことが一般に推量されることと、話者が「出かけなさい」「出かけよう」と個人的に考えることは、矛盾を引き起こさないが、ノニのように、出かけないことを話者自身の意見として持っているときに、同時に「出かけなさい」「出かけよう」と話者が考えることはできないからである。

1. 2. Blakemore 1987, 1989

Blakemore 1987、1989では、英語の but の分析において、「文脈含意」という概念を用いている。次はそこからの引用である。

(4) John is a Republican, but he's honest.

この時 but が行っているのは、前件から 'John is not honest' という文脈含意を導出できるように制約を課し、後件の命題が、これの否認として関連性を有していることを示すことである。

Blakemore の依って立つ関連性理論において、文脈は、話し手、聞き手の心理的観点から定義がなされている。そして伝達 (communication) が聞き手の能力に訴えるものだとするれば、伝達における文脈とは、聞き手が「関連性」の追求のために、先行発話、物理的環境、記憶、推論などにより、心理的に構築できるものでなければならない。(4)において否認される文脈含意も、伝達の成功のためには聞き手が心理的に構築できる必要があり、話し手は聞き手がそうできると考えて文を発話するのである。

本稿では、丹羽1998の提示した「一般に推量される」という概念を、Blakemore 1987、1989の文脈含意というより明確な概念に置き換えたい。つまり、(1)のケドが使用される文においては、「父は出かけない」という文脈含意を聞き手が構築するが、聞き手が構築するものであるから、それが後件と矛盾しても話し手の違和感、不満などは表さないし、「出かけなさい」「出かけよう」のような話し手の意見とも矛盾しないのである。

2. 話し手の知識と違和感・意外感、不満

丹羽1998の「一般的に推量される」を伝達における文脈含意と捉えるのに対し、「話者個人の推量・希求」を、「話し手の知識」という観点から説明したい。話し手の知識とは、話し手が日常を生きていくにあたってより良い行動を選び取るために持つ世界に対する知識である。そして、違和

感・意外感、不満とは、この知識が、話し手の遭遇する現実によって、修正を強いられたり、実現を断念させられたりするような場合、知識の処理に負担がかかることで生じるものと定義する。

このような心理的、経験的側面から、丹羽1998の(3)の規定を捉え直すことがここでの主張である。つまり、(3)の対立はノニの前件・後件の対立ではなく、「話し手の知識と現実の事態」の対立であるとするのである。このように考えるのは、違和感・意外感、不満という感情的な概念は、ノニ文の発話に関係なく人が感じるができるものであり、独立に説明しなければならないからである⁴⁾。以下具体的に述べる。

話し手の知識には、雪が降っているときには出かけないとか、太郎と次郎が同じ身分である、といった世界に対する知識があり、実際に雪が降っている状況にいたり、太郎が学生であることを確証したりする場合に、推論によって「次郎も学生である」とか「父は出かけない」といった個別的な仮定を得る。しかし、これらの仮定は、現実と矛盾することがある。この関係を次のように表そう。

- (5) a. イ 雪が降る →出かけない
 ロ 雪が降っている
 ハ ∴ 父は出かけない [父は出かけた]
- b. イ 太郎は身分Xだ→次郎は身分Xだ
 ロ 太郎は学生だ
 ハ ∴ 次郎は学生だ [次郎は学生ではない]

イは、話し手が元から知識として持つ含意関係である。ロは実際の場面に即して獲得した個別的知識、ハはイとロから分離規則 (Modus Ponens) によって得た個別的な仮定であり、これが [] で示した現実

また、話し手が持つ知識には、含意関係において単なる期待⁵⁾が帰結するものも考えられる。例えば待ち合わせで恋人が来ないことや、音楽を聞いている時に工事が始まったことに対して不満に思う場合に、「待っていたら現れる」や「音楽を聴いていたら工事は始まらない」のような知識を持っているとは言えない。むしろ期待が含意されている。

- このように話し手の知識が期待を含意する場合、負荷をかける現実の事態に対して抱く感情は、違和感や意外感よりもむしろ不満が強くなる。しかし、この場合も、(5)同様、現実の事態が話し手の知識に負荷を与えていると考えられる。

以上は、人が元から持っている知識と、場面によって発動される仮定、期待を区別して考えた。しかし、仮定や期待そのものが、「考え」や「望

み」として、現実の事態に遭遇する以前から持っている知識となっていることもありうる。その場合、負荷を負うことになる知識は、その考えや望みである。例えば、実現が遠いと思っていたことが、突然実現したり、来ないでほしいと思っていた人が突然現れたりする場合がこれにあたる。この場合の図式化は単純である。

(7) a. 実現は遠い [実現が遠くなかった]

b. 太郎には来ないでほしい [太郎が来た]

以上の議論を取り入れて、話し手が違和感・意外感、不満を感じる際の知識と現実の事態の関係として(3)をまとめ直すと、次のようになる。

(8) 話し手の知識と現実の事態の関係

話し手が $P \rightarrow R$ という知識を持ち、かつ、 $P^{\sim}$ が成立し、推論を経て $R^{\sim}$ を仮定・期待する状況において、または、 $R^{\sim}$ という知識を持つ状況において、それに反し、実際には $Q (= \sim R^{\sim})$ が成立している。

3. ノニ文の機能

話し手が(8)のような心的状態にあるとき、次のようなノニ文が発話される可能性がある。

(9) a. 雪が降っているのに、父は出かけた。(=(1a)、cf. (5a))

b. 太郎は学生なのに、次郎は学生ではない。(=(1b)、cf. (5b))

c. 待っているのに、現れない。(cf. (6a))

d. 音楽を聴いているのに、近くで工事が始まった。(cf. (6b))

e. 実現は遠いと思っていたのに、意外に早かった。(cf. (7a))

- f. 太郎にはこないで欲しかったのに、やって来た。(cf. (7b))

一見して分かるように、前件は話し手の知識を反映し、後件は現実の事態となっており、その結果、両者は対立関係にある。しかし、ノニ文は、単にこれらの関係を叙述するわけではなく、聞き手への伝達における機能と相俟って発話される。

これらの後件は、単に現実の事態を写し取っているのではなく、話し手が違和感・意外感、不満を感じるものとして、聞き手に提示されている。ノニ文を使用する目的は、聞き手に対して、ある事態が話し手に違和感・意外感、不満などを感じさせることを知らせることにある。例えば、「父が出かけた」という事態を考えて見よう。この事態が意外であることは、話し手の知識との関係から決まるので、話し手にとっては容易に分かる(感じられる)ことであるが、聞き手にとっては必ずしもそうではない。そこで「雪が降っているのに」と述べることは、「父が出かけた」という事態が、話し手に違和感・意外感、不満を感じさせていると示すことになる。ノニ文で(2)のように言えなかったのは、違和感・意外感、不満を感じさせる事態は、その定義からも分かるように、話し手の知識に負担をかける既に成立している事態だからであり、「出かけなさい」や「出かけよう」のような話し手自身の感情は、違和感・意外感、不満の対象となりにくいのである⁶⁾。

従来ノニは、接続助詞と終助詞の用法があるとされてきた。(10)は国立国語研究所(1951; 177)に接続助詞として挙げられている実例である。

- (10) a. 研究室ではあかも簡単に進んだのに工場ではイソオイゲノールを純粋に多量に作ることができないのであった。
- b. 「ねえ、武智さん、わたしの彼氏、私がこれほど思ってるのに、ちっともわたしのことを思ってくれないのよ」

- c. 一個の人間がいかに生きたか、またいかに社会に貢献し、あるいは害を及ぼしたか、ということこそ大切であるのに、それよりもその人間がいかにして憂き世からあの世へ行ったか、つまりその死に方が重視され、そこに究極的な価値判断の基準がおかれる。

これら接続助詞と呼ばれるものは、「前件のに」を述べることにより、後件の表す事態に対する聞き手の解釈に制約を課す働きをしている。たとえば、話し手が「工場ではイソオイゲノールを純粹に多量に作ることができない」とだけ述べた場合、この情報は単なる事実の報告であるかもしれないし、この情報の表す事態を当然のことと話し手は考えているかもしれない。しかし、この情報に「研究室ではあかも簡単に進んだのに」と前件を付けることにより、話し手に違和感・意外感、不満を感じさせる事態として、聞き手に提示することができるのである。

一方、次は国立国語研究所(1951; 178)で終助詞とされているものである。

- (11) a. 「けっこんまえまでそんな失礼なこといわなかつたのに」
 b. 「いらないよ」「アラあげるのに」
 c. 「だめじゃないか。せっかく、うまくおいつめてきたのに」

接続助詞の場合、「前件のに」は後に続く情報の解釈が限定されたが、終助詞の場合に制約が課されるのは、話し手が事態をどのように捉えているかという話し手の態度、評価に関する聞き手の解釈である。例えば最近妻が太ったことを、夫が妻に言ったとする。これに対して、妻は自分の努力不足と捉え、夫の発言を最もだと受け取るかもしれないし、特に何も思わないかもしれない。よって、妻が黙っていれば、妻がどう考えているかを、夫はどのようにでも解釈できてしまう可能性が残るのである。妻が

(11a)のように述べることは、妻が夫の発言をどのように捉えているかを夫に示すことであり、話し手（妻）の態度、評価を表すニュアンスが強くなる7)。

このように、後件（現実の事態）は、違和感・意外感、不満を感じさせる事態として捉えられている。そしてノニの前件8)もこれと同様に、単に話し手の知識を表明しているのではなく、現実の事態に違和感・意外感、不満を感じる原因・理由・根拠として、聞き手に提示されていると言える。たとえば、もし雪が降っていなければ、父が出かけることを意外に思うことはないかもしれないし、実現が遠いと思っていなければ、実現が早かったことは意外でないはずである9)。そして、聞き手に対して根拠を述べる文なので、知識と現実が(7a)のように対立していても、(9e)のように「と思う」を使用しなければならない。

以上をまとめると、「 ρ のに ψ 」（従来の接続助詞）あるいは ψ に対する「 ρ のに」（従来の終助詞）というノニ文の機能は、次のようになる10)。

- (12) a. ρ という理由により、 ψ を、話し手にとって違和感・意外感、不満を感じさせる事態を表す文と解釈せよ
- b. ρ という理由により、話し手が、当該の事態 ψ に対して、違和感・意外感、不満を感じていると解釈せよ

4. ノニと語用論的意味

本稿では、ノニの機能を、聞き手に対して、ある事態が話し手に違和感・意外感、不満などを感じさせることを、その根拠を述べることにより知らせると考えたが、これは、ノニ文を使用しなくても達成される。次の例を比べられたい。()内は、各例の発話される状況を記している。

- (13) (訪問の約束をしていた相手が予定外の時間に来たことに驚いて)

- a. こんなに早い時間に…
 - b. こんなに早い時間なのに…
- (14) (ある人が海外旅行に行ったということに不満を感じて)
- a. 皆がこうして一生懸命働いている時に…
 - b. 皆がこうして一生懸命働いているのに…
- (15) (知人からイベントの準備に多くの日数を費やしたことを聞いて驚いて)
- a. たったあれだけのために…
 - b. たったあれだけのためなのに…

(13)～(15)のbは、これまで分析してきたノニ文であるが、aも違和感・意外感、不満を現実の事態に対し認識している。(13)に共通する知識と現実の事態の関係は次のようなものである。

- (16) イ (朝) 早い時間だ→Aさんは来ない
 ロ 早い時間だ
 ハ ∴ Aさんはまだ来ない [Aさんが来た]

(13a,b)の話し手は、[Aさんが来た]という現実の事態によって、イの知識に負荷がかかり、「早い時間だ」という根拠を述べることにより、Aさんが現れたことに対する意外感を表していると考えられる。

(13)～(15)のaとbが同じ意味を表しているという見解は、田野村1989が「述語句省略文」と呼び、次の(17)と(18)が同じ現象であるとしていることによっても支持される。次の(17)の下線部は(13)～(15)のaに、(18)の下線部は(13)～(15)のbに相当するノニ文である。

- (17) a. こんなに早い時間に珍しいわね。 (cf. (13a))
 b. 皆がこうして働いている時にいい気なもんだよ。 (cf. (14a))
 c. たったあれだけのことのために大変ね。 (cf. (15a))

- d. (くよくよしている人に対して) 一度の失敗くらいで情けないわね。
 - e. (お遣いに行った子どもに) たった一人で偉いわねえ。
 - f. (盗みをしたことを聞いて) 裁判官ともあろう人が何ということだ。
- (18) a. こんなに早い時間なのに珍しいわね。(cf. (13b))
- b. 皆がこうして一生懸命働いているのにいい気なもんだよ。(cf. (14b))
 - c. たったあれだけのためなのに大変ね。(cf. (15b))
 - d. (旅行中止の報せを受けて) 楽しみにしていたのに残念だ。
 - e. (寝小便した子供に対して) 小学生になったのにだらしない。
 - f. (上手くできたことに対して) 習い始めたばかりなのに大したもんだ。

田野村1989は、これらの現象は、下線部の後に「現われるとは(17a) (18a)」「旅行に行くなんて(17b) (18b)」などの「述語句」が省略されていると考えている。しかし、本稿では、これらを述語句の省略というよりも、本来二文であるものが、表現価値の近さからあたかも一文のように述べられたという側面を重視し、「短絡的な結び付き」と呼ぶことにする¹¹⁾。(18)の下線部のノニ文「こんなに早い時間なのに(18a)」は終助詞的な用法であり、人が現れたという現実の事態に対する態度、評価を表している。同様に、(17)も下線部だけで、現実の事態への態度、評価といえる。一方、(17) (18)の下線を施さなかった部分「珍しいわね(17a) (18a)」「いい気なもんだよ(17b) (18b)」「大変ね(17c) (18c)」等も、現実の事態への態度、評価を表している。(17) (18)の文は、このような現実の事態に対する態度、評価という表現価値の近さから、本来二文であるものが、あたかも一文の

ように述べられているのである¹²⁾。

一方、「短絡的な結び付き」は、次のような例では起こらない。

(19) ?? (人が休んだことに対して) 皆が休むので主体性がない。

これは「皆がやすむので」が「休んだ」という事態に対する評価を表さないためである。田野村1989が指摘する(17)(18)の現象は、違和感・意外感、不満を感じる根拠を示すことにより、現実の事態への話し手の態度、評価を表している文について起こっているのである。田野村1989の、(17)(18)を同様の現象であるとする直感は、(17)の下線部と(18)の下線部が同じ性質の文であることをも意味していると考えられる。

ノニ文の表す意味は、このように、ノニという語を持たない文でも表現することができる。しかし、(17)の下線部は、「こんなに」「こうして」「たった」「一度の〜くらいで」「ともあろう」など、話し手が当該の事態をどう捉えているかを示す語彙が含まれている一方で、(18)の下線部(ノニ文)は(18d)～(18f)のように必ずしもこのような語彙は持たず、ノニという語を持つことによって、同様の意味が表現されている。つまり、ノニは、個々の語彙や文脈によって表現されるような語用論的な意味を、語彙の意味として定着させているということができる。

5. まとめ

本稿では、ノニに伴うとされてきた違和感・意外感や不満といった概念を、人間の経験的側面からノニと独立に説明し、ノニの機能としてこの経験的側面をいかに意味に取り入れているかを見た。また、この意味は、語彙や文脈によって表現可能であり、ノニはそのような語用論の意味を語彙化¹³⁾させたものであることを、田野村1989の「述語句省略文」を援用して述べた。

クセニ、ニモカカワラズや古代語のモノヲなどノニと類似した語彙につ

いては別稿を準備しているが、本稿で提出した概念は、それらに限らずより広い言語現象への適用が可能であると思われる。また、語用論的な意味が語彙化する過程やメカニズムについて、歴史的な観点からの考察も必要であろう。それらについては今後の課題としたい。

註

- 1) ガやケレドモなども基本的には同じ機能と考えられる。以下ケドで代表する。
- 2) 国立国語研究所(1951; 176)、今尾(1994; 97)、前田(1995; 105)など。
- 3) 丹羽1998では()内「または～P」が抜けている。しかし論文の他の箇所を参照すると、補うべきだと思われる。
- 4) この点で、知識の所有者は「話し手」でなくてもよいが、以下「話し手」で代表させる。
- 5) ここでいう「仮定」「期待」の区別は、丹羽1998のいう「推量」「希求」の区別に影響を受けている。
- 6) このことに関連して、現実の事態は、話し手自身のことであるなど、話し手にとって自明であればあるほど、違和感・意外感、不満を感じる事態とはなりにくいということが言える。森山・安達1996は、「*僕も一緒に行けばよかったのに」という文の不適格さを、ノニは「話し手が自分の行為について述べる時には使えない」(p. 11)と説明している。これは、話し手が行かなかったことが話し手にとって自明であり、違和感を感じる対象となりにくいからである。
- 7) 接続助詞の用法でも話し手の態度・評価と言ったニュアンスが伝わらないわけではない。厳密に言うと、終助詞としてのノニ文は、現実の事態を表す文を聞き手に解釈させることへの制約を持たないということになる。
- 8) 「前件」という語は当然「後件」と対になる概念であるが、ここでは、終助詞とされてきたノニに前接している節も、「前件」の中に入れて呼んでいる。
- 9) ここから、ノニの前件は、原因・理由・根拠となる文でなければならぬということが言える。渡部2000は、「??両親は背が低いかも知れないのに、子供達は皆背が高いなあ。」という文の不適格さを、ノニ文の前件が「話し手にとっての事実として確定されている必要がある」(p. 118)からとしているが、本稿の観点からは、前件が、後件を意外とする根拠と

なっていないからだと説明できる。つまり、両親の背が低いかどうか分かなければ、子供達の背が高いことが意外かどうかは、判断できないのである。

- 10) 本稿では、聞き手への伝達という側面からノニ文の機能を考えたが、ノニ文は「独り言」においても使用されうる。(11a)は夫の発言に対する妻の独り言とも考えられるだろう。この場合、聞き手への伝達という側面は失われ、専ら話し手の態度、評価を表すことになる。この用法は、(12b)の用法が拡張したものと捉えておきたい。
- 11) (17)(18)を述語句の省略と見た時の、他の省略現象との詳しい違いについては田野村1989を参照されたい。
- 12) 筆者はまた「雪が降っているのに出かけるなよ」のような、後件に禁止や否定のムードが現れる文も、「短絡的な結び付き」と考えている。この「出かけるなよ」は、出かけないでほしいという、出かけようとしている相手に対する態度、評価を表している。従来このような文は、否定表現について指摘され、否定のスコープによって分析されることもあった(戸村(1988; 131)、前田(1995; 113-116))が、話し手の評価を表せば命令でも良い。たとえば、(6a)を元に「待っているのに、早く来いよ」ということは可能である。
- 13) 語彙化 (lexicalization) という語は、複雑な構造が単一形態の単語となる場合や、音韻変化によって独自の語が作られる場合などにも使用されるが、ここでは、文脈から読み取れる語用論的な意味を、語彙が表わしているという意味で使用している。詳しくは Traugott 1999参照。

参考文献

- 今尾ゆき子 1994 「条件表現各論——ガ/ケレド/ノニ/クセニ/テモ——談話語用論の観点から——」『日本語学』vol.13-1、明治書院、92-103
- 国立国語研究所 1951 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』国立国語研究所報告 3
- 田野村忠温 1989 「不適条件表現に関する覚書——現代日本語の二種の文法現象をめぐって——」『奈良大学紀要』17、164-176
- 戸村佳代 1988 「日本語における二つのタイプの譲歩文——「ノニ」と「テモ」——」『文芸言語研究 言語編』13号、筑波大学 文芸・言語学系、123-133
- 丹羽哲也 1998 「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』第五十巻第十分冊、91-125

前田直子 1995 「逆接を表わす「～のに」の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』第5号、99-123

森山卓郎・安達太郎 1996 『文の述べ方』くろしお出版

渡部学 2000 「逆接表現の記述と体系——ケド、ワリニ、ノニ、クセニをめぐって——」『現代日本語研究』、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座、112-133

Blakemore, Diane 1987 *Semantic Constraints on Relevance*, Basil Blackwell, Oxford.

————— 1989 'Denial and Contrast: A Relevance theoretic analysis of *But*', *Linguistics and Philosophy*, David Dowty and Francis J. Pelletier (eds.), Kluwer Academic Publishers. 15-37.

Traugott, Elizabeth Closs 1999 'Grammaticalization and lexicalization', *Concise encyclopedia of grammatical categories*, Keith Brown and Jim Miller (eds.), Elsevier Science Ltd. 177-183.

(大学院後期課程学生)

On the Japanese 'Adversative' *NONI***— a Lexicalization of its Pragmatic Meaning —**

Tomohide KINUHATA

It is an acknowledged commonplace that *noni* is unique in its meaning of 'adversatives', namely, 'the sense of incongruity', 'discontent', etc. The factor behind the semantic difference has, however, received little careful attention. In the present article, this aspect of *noni* will be explained by investigating (1) 'the sense of incongruity' or 'discontent', (2) how *noni* functions in language use.

After referring to previous studies (section 1), I will answer the first question by defining these feelings as factual events weighing on human's knowledge (section 2). When a speaker has such feelings, he/she uses *noni* to inform the hearer of these feelings by giving utterance to the reason why the speaker feels in that way (section 3). To demonstrate these pragmatic meanings of *noni*, we will observe sentences without *noni* conveying almost the same meanings as sentences with *noni* (section 4).

From the analysis of this paper, we can say that *noni* is not a peripheral case of the grammatical category 'adversatives' but lexicalizes 'the sense of incongruity' or 'discontent' to inform the hearer of those feelings.

キーワード：話し手の知識 違和感 ノニ文の機能 語用論的意味 語彙化